

友人選択理由の変化と類似性について

I. 問題の所在

近年「友だちがいない」「学校にうまく適応できない」という言葉をニュースでよくみるようになり、以前よりも自分の身近なものになってきている。

「友だち」とは一体何なのか、人それぞれ認識が異なるのだろう。そこで我々がどのように「友だち」を選択し、認識するようになっていくのか知りたいと思った。

従って、本研究では、

- (1) 友人選択・友人関係の形成における幼児期から青年期への発達のな違いや変化
 - (2) セルフ・モニタリングが友人形成に与える影響について
 - (3) 友人関係についての考えについて男女差および生まれ順などの要因が関わっているのか
- について分析および考察することを目的とする。

II. 研究方法

- ・文献研究と質問紙調査

文献研究で友人関係形成についての知識を得た上での考察を踏まえて自由記述・選択項目などから成り立つ質問紙を作成し、配布した。

【対象】

愛知県内の4年制大学に通う大学生 1~4年生（男子47名、女子53名）、計100名

【内容】

a. 小・中学生の頃についての選択項目

- ・心配事の相談相手は誰であったか。
(家族・友人・先輩後輩・教師・その他 のうち1つ選択)
- ・学校生活で満足していたこと、不満だったことは何か。(授業・友人関係・成績・部活・その他 のうち一つ選択)

b. 恥ずかしかった経験についての自由記述

- ・中学生時代と大学生になってから現在まで

c. セルフ・モニタリング 25項目

岩淵千明・田中国夫・中里浩明ら(1982)で使用されているセルフ・モニタリング尺度(Snyder, 1974) 25項目を使用した。岩淵らと同様5件法に変換し平均値を出したのち、文献内で分析されていた「外向性因子」「他者志向性因子」「演技性因子」の3因子に分けた。

d. 友人関係傾向調査 35項目

落合・佐藤(1996)より、友達とのつきあい方に関する35項目を使用し、友達とつき合うときに自分が感じたり、考えたりすることにどの程度当

てはまるかについて5件法で調査した。因子名は文献内で命名された6因子(①本音を出さない自己防衛的なつきあい方②誰とでも仲良くしていきたいというつきあい方③自分に自信をもって交友する自立したつきあい方④自己開示積極的に相互理解しようとするつきあい方⑤みんなと同じようにしようとするつきあい方⑥みんなから好かれることを願っているつきあい方)にする。これらの6因子を2つに分け、友人とのつきあい方を次のA~Dの4つに分類されたものを基準として利用した。

- A 「浅く広くかかわるつきあい方」
- B 「浅く狭くかかわるつきあい方」
- C 「深く広くかかわるつきあい方」
- D 「深く狭くかかわるつきあい方」

III. 結果と考察

1. 友人選択・友人関係の形成における発達のな変化や特徴

友人選択をするうえで相手に期待するものは年齢や性別によって変わってくる。友人関係形成の要因は、年齢が上がると相互的接近は減少し、人格的尊敬・一致・共鳴が児童期以降に上昇するとされている。Table1にあるように、幼児期から小学校低学年までの時期は自己中心的な友人関係であり、高学年にかけては内面的な理由へと変化していく。自分たちの考え方の下で行動する可能性を得ると仲間特有の「仲間律」という行動規範が生まれ「他律」から「自律」への移行の通過点となる。

Table 1 高校生までの発達段階ごとの友人選択理由

発達段階	友人選択の理由
幼児期	自己中心的・近くにいる
小学校低学年	一方的
中学年	相互的接近 所属欲求(仲間への依存)
高学年	有機的好感 自分に類似している相手(趣味や成績)
中学校	同情・愛着 自分に類似している相手(親友の独占)
高校	人格的尊敬 互いに相手の自立性を認める

また、質問紙内の「心配事があるときの相談相手は誰でしたか。」という問いについては、小学生の頃は家族だった相談相手は中学生になると友人を選択する人が増加し逆転した。中学生になり自分たちの考え方の中で行動する可能性を得ると「他律」から「自律」へ移行する。これにより小学生と中学生では頼る相手が大きく変化することが確認された。

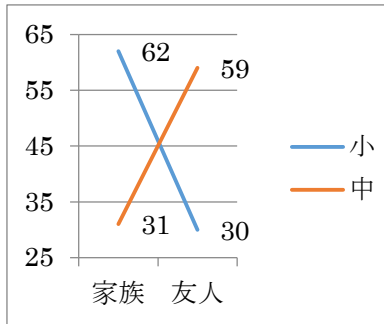


Figure1 小学校時代と中学校時代の比較

落合・佐藤 (1996) らによると、男女差の現れる中学生から大学生にかけて友人との主な活動内容には変化があることが分かっている。

Table2 友人との主な活動内容の変化

	男子	女子
中学生	共有活動	親密確認活動
高校生	共有活動 + 相互理解活動	閉鎖的活動
大学生	相互理解活動	相互理解活動

中学生の時期は外面の交友活動自体は男女差がうまれてくるが、友人の求心力が大きな特徴である。友人とは同質性を重要視した付き合い方であり、親から独立する根拠地を形成している。高校生になると男子はお互いの相違点を認め合って共存するような全方向的な付き合いをするようになる一方女子は防衛的な付き合いをする。また、同質性を求めるだけでなく**異質性を受け入れる**という二つの面をもつようになる。大学生においては男女ともに友人に対する欲求の中でも「相互尊敬欲求」が最も強くなった。よって付き合い方が異質性を受け入れ、お互いの相違点を認め合う関係であることを示す。

次に中学生時代の特徴を表す結果となった質問紙結果を示す。

- 1 あなたが恥ずかしいと感じるのはどんなときですか
- 2 中学生時代に友人に合わせて考えを変えたり、行動したりしたことはありますか

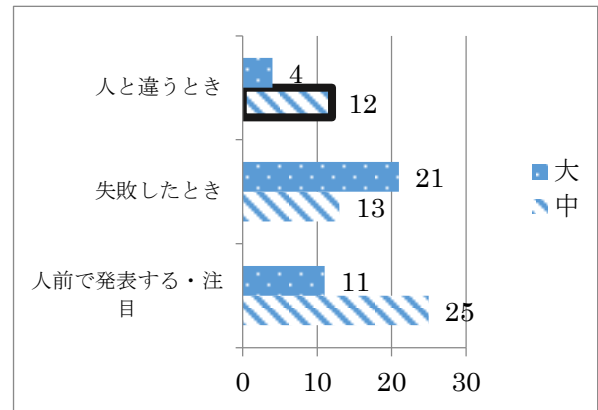


Figure2 恥ずかしかった経験

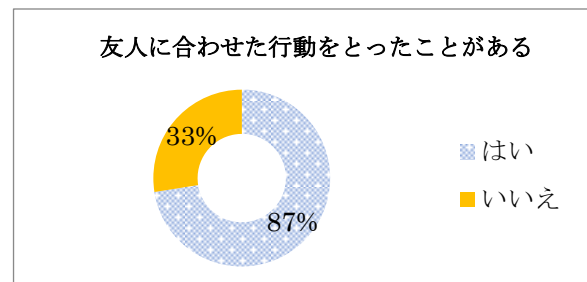


Figure3 友人に合わせて行動の有無

「人と違うとき」という項目に関して、中学時代は大学生の3倍にもなっている。これらのことから、中学時代は「社会的不調和」「注視」という点では周りとの同調関係を求めているといえるだろう。しかし一方では、現代の特徴ともいえる学力・受験戦争などにもまれて競争関係にもあり、いかに複雑な人間関係をもつ時期であるかがわかる。また、この結果は中学生時代の子どもが友人と合わせるために本音を出してぶつかり合わないような表面的なつきあい方にならざるをえなくなっている状況を示すと考える。

2. セルフ・モニタリングについて

セルフ・モニタリング (SM) とは、「状況や他者の行動に基づいて、自己の表出行動や自己呈示が、社会的に適切なのかを観察し、自己の行動を統制することである」と定義される。

さらに個人の社会的行動は、外的要因または内的要因のどちらかの情報に基づいて決定されるとしているが、これらの個人差は尺度によって測定される。Briggs, Cheeks, & Buss (1980) の分析をもとに3因子を抽出した岩淵・田中・中里 (1982) の研究を参考にした。3因子には特徴がある (Table3 参照)。

Table3 3 因子の特徴

MS 高	外向性	他者と知り合う初期の過程では社会的相互作用において活動的・率先的・指示的なアプローチをとる。
	演技性	種々の状況や他者の反応を考慮したうえで自己表出や自己呈示を行うという印象管理ができる。
MS 低	他者志向性	状況のおよび対人的に適切と考えられる社会的行動を敏感にかつ実際的に行うことについて比較的柔軟で適格的であると自分自身で見なしている。

3. 友人関係傾向調査と類似性

(a) 性差

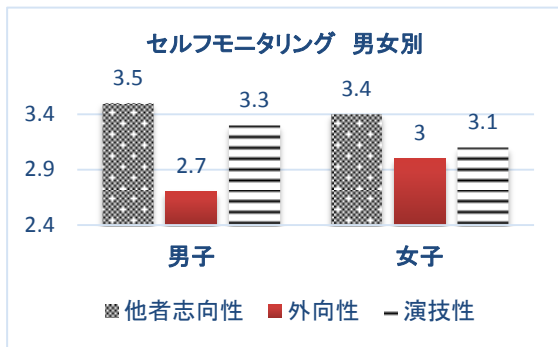


Figure4 SM 男女別

Figure4 を見ると、差が表れているのは“外向性”の項目である。思春期になると特に女子は、「友人」にどう思われているのかという彼女たちの中での社会的立場を気にしていなければならない状況に置かれることが多くなっている。よって自分の居場所を作るために活動的に自分をアプローチし、自己の行動を統制しながらかかわっていくということがわかった。

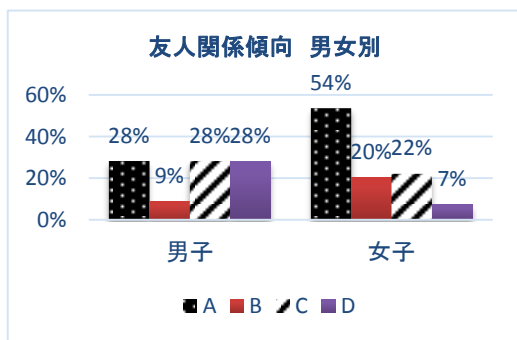


Figure5 友人関係傾向 男女別

Figure4 と関連し、友人と表面的に浅く広くかかわる女子が半数を超える 54%を占める一方で深く狭く付き合っているものはわずかに 7%のみである。男子は、友人に望むものとして“類似性”を挙げている研究結果があることから、相手を理解するうえで友人と深い

関係をもつことが必要になるためこのようになったのではないだろうか。

(b) 出生順

浜崎・依田（1985）らの調査によると、出生順と性格とのあいだに明確な関連があることが明らかにされている。

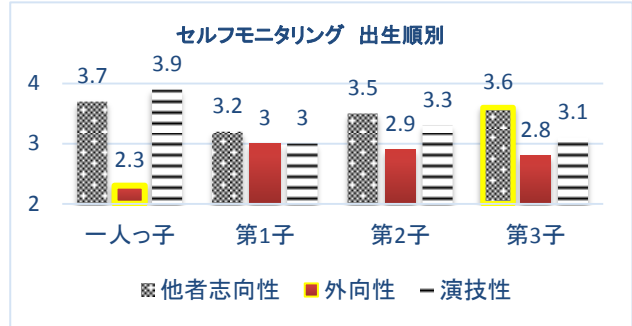


Figure6 SM 出生順別

外向性について、第1子から第3子にかけて徐々に値が低くなっている。反対に他者志向性は徐々に高くなっている。第1子は、下に幼い兄弟がいる場合には子ども自身も弟や妹に手を焼く親を見ているとなかなかわがママを言えないために自己を抑制してしまったりしがちなのではないか。これが、高い外向性と低い他者志向性に表れている。筆者は、第3子については一人っ子同様に自己の社会的行動の状況的適切さについての関心がそれほど高くなく、自己の行動を状況に応じて統制する傾向のため他者志向性が突出して高いのではないだろうかと考えた。

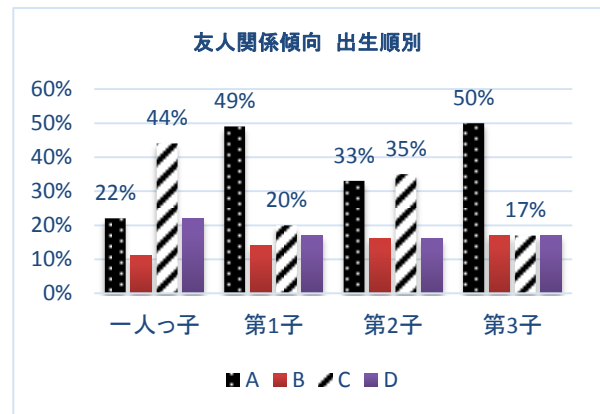


Figure7 友人関係傾向 出生順別

“一人っ子と第2子”“第1子と第3子”がそれぞれ類似していることがわかった。違いは周囲に対してどのようにかかわっているかではないか。第1子は自制し状況を把握して行動するなど周囲とのかかわりは比較的開放的であり、第3子も活動的で

おしゃべりで周囲と打ち解けやすいという特徴をもつ。

(c) 大学における専攻別

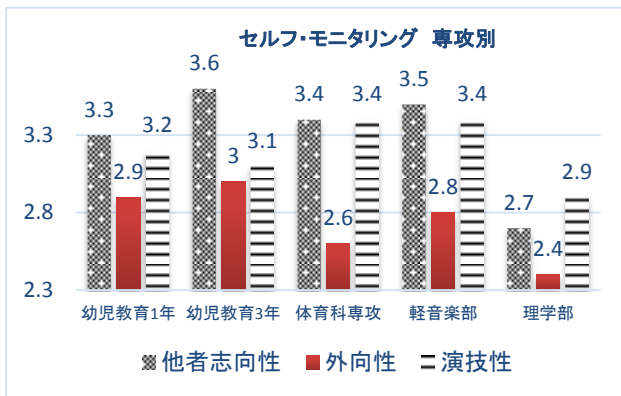


Figure8 SM 専攻別

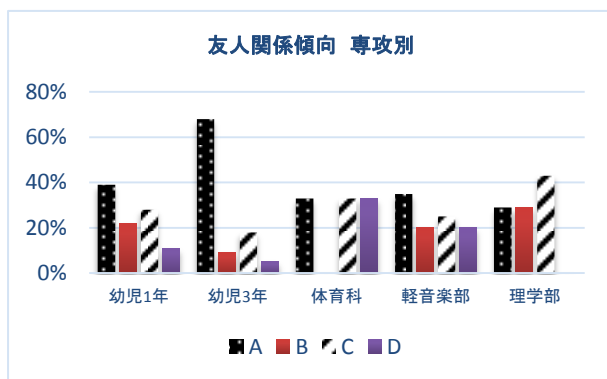


Figure9 友人関係傾向 専攻別

【 幼児教育専攻 】 同じ専攻の異なる年代を調べることで、専攻による傾向は大変似ているものであることがわかった。また、ほとんどが女性であるために全体のセルフ・モニタリングの女性の平均値、友人関係傾向も A が最も多く近い値がでた。

【 体育科専攻 】 対象が全員男子のため男子の平均的なセルフ・モニタリングとほぼ同じ結果となった。中学生のころから部活動を続けてきた者が多く、仲間意識や相手を思いやって支え合おうという気持ちが養われる中で D が 33% を占める結果になったのではないだろうかと思えた。

【 軽音楽部 】 軽音楽部とは大学内の部活動を指すが、この集団は観客に対してライブを行うという点で“演技性”が高く、様々な楽器や声が重なり合って互い周りに合わせて自己を抑制しながら作り上げられるため他者志向性も高くなるという結果になった。

【 理学部 】 特に外向性が非常に低いのは、常に実験や研究に一人で打ち込むことが多いからではないか。SMの結果から、人前で話すことに長けているため大勢と関わり顔がひろくなるが、外向性はひくいため表面的な付き合いという関係にはなりにくいと考えた。

IV. おわりにかえて

これらのことから、発達段階によって友人選択の理由は様々な経緯を経て同質性から相互尊重へと向かうこと、セルフ・モニタリングは個人の行動の要因を示すため人間関係を築く傾向を調査するうえで有効な分析手段であること、友人関係傾向は性別・出生順・専攻によって類似性が生じることがわかった。

引用・参考文献

- ◎「幼児集団の形成過程と 協同性の育ちに関する研究」 - 全国幼児教育研究協会
www.zenyoken.org/report/pdf/h23educationalreport.pdf
- ◎伊夫伎 冴香「性格の類似性が友人選択に及ぼす影響—5つの性格側面に対する自己受容度と重要度の観点から—」
- ◎八城薫 (2010)「大学生のセルフ・モニタリング傾向と友人選択および友人関係スタイルとの関係」第12号
- ◎宮下一博 (1991)「大学生の独自性欲求の類似化に関する研究」教育心理学研究 第39号 214—
- ◎都筑学 (2006)「思春期の自己形成」ゆまに書房
- ◎岩淵千明・田中国夫・中里浩明 (1982)「セルフモニタリング尺度に関する研究」第53号 54—57
- ◎和田実 (1996)「同性への友人関係期待と年齢・性・性役割同一性との関連」第67号第3号 232—237
- ◎落合良行・佐藤有耕 (1996)「青年期における友達とのつきあい方の発達の变化」第44号 55—65
- ◎浜崎信行・依田明 (1985)「出生順系性格 (2) —3人きょうだいの場合—」横浜国立大学教育紀要 第25号 187—196